

# 幼兒の爲に歌を作りて (2)

葛原しげる

大正四年頃、最も盛んになつて、幼兒の世界にもその存在を明かに、且つ確かにして、入つて來たものに、蓄音器があり、活動寫眞がある。前者は、ラツバのついてゐるのが普通であつて、私の唯一の小型の古い蓄音器は、長女の生れた時、琴よりも尺八よりもと思つて、レコードをきかす氣になつて買ったラツバなしの、その頃最新式のユニホンといふのでした。しかし、どこにでも有るのは、ラツバ付でしたから

箱の中から聲が出る

ラツバの奥から聲が出る

といつたのでした。これに比して、活動寫眞は、

まづ、小松氏が曲を作つて、後から、私は歌詞を當てゝ作る事になりました。曲趣は、いかにも忙しく、變化の多いものですが、何を中心に歌ふが善いかの決定に因つて、それまでに、僅かの經驗しかない映畫の思出の中に、筋の通つた物語でなく、何か、何處かの園遊會か、街路の四つ角かの光景のあつたことを、はつきり思ひ出し得ましたので、それを二節に分けて作つてみました。その中に、子供や犬が居つたか何うかも知らねば、子供の活動する様も少し怪しいのですが、少くとも蒐め得た外國のコードモの爲の畫には必らず犬が入る事を忘れませんでしたから、犬を入れました。

少くともさういふ映畫を見てゐる大人も、子供も、きつと、効果的にそれらを見て、にっこりするでゐらうと思ふ様なものを出したのです。

### 活動寫眞

小松耕輔氏曲

一、出て来る 出て来る、いろんな人が、

あれ あれ 小さな犬まで来るよ

笑つて来る人、駈け出す人

子供は 足並そろへて来る

二、自動車、荷車、馬車、電車、車

あとから〜續いて来るよ

あれ〜来た来た、飛行機まで

子供は手をあげ 帽子を振る

(大正幼年唱歌第四集)

第一節の笑つて来る人や、第二節の手をあげ帽

子を振る子供はめい〜、活動寫眞にうつされてゐる事を知つてゐたのでせう。しかし、今の東京の光景でない點は、第二節の車の種々が、一緒に寫つてゐる所です。疾走車と、緩走車とは道路を異にしてゐる今の東京の大通りですから……。しかし、さうしたせんさくよりも、二つの音を切れ〜に使つた曲に、あてはめるのですから、即ち出て 来る 出て 来るに、對照して、自動車や、荷車を出さうとしますと、

じど う車、にぐるま、馬車、電車

となります。就中、「でんしゃ」が「でしや」にさへ聞えるかも知れない事になりました。さういへば、「自動車」を「じど、う車」とし、荷車を「にぐるま」として、各々、兩斷してしまつた形になつてゐますが、これは、形の上であつて、歌へば、ずん〜、次々に、後から〜現は

れて来る感じは、豊かに出てゐるのです。どうぞ、  
實地曲について、歌つて見て下さいまし。

○

「かなしかりけり」といはないで、かなしさをあ  
らはし、「さびしさ」も、さびしいといはずに表は  
す方がよいといふので、

枯れ枝に鳥とまりて秋の暮

を教はつた事がありますが、

御門

梁田 貞氏曲

急いで來れば 見えた 見えた

御門が見えた

うれしや うれしや

御門の中に あれ／＼見える

先生が見える

うれしや うれしや

〔大正幼年唱歌〕第五集〕

梁田氏の名曲がついてゐますが、この「うれし  
や／＼」を入れないで、

急いで來れば、見えた 見えた

御門が見えた

御門が見えた

御門の中に あれ／＼見える

先生が見える

先生が見える

ともしかけました。しかし、幼児は、ことに、女  
兒は、喜怒哀樂を、すぐ言葉に現はし、その後す  
ぐ動作に、最も適確に表はするのが常です。小さな  
拳で胸を叩いて、「あら、うれし」とは、實に、よ  
く謂ふのです。また「あ、つまらない」とも、よ  
く謂ふのです。大人ならば

御門が見えた／＼

先生が見えたり

と反覆して、嬉しさは、十分に出来るのですが、幼児ですから、そのまゝ、

うれしや〜

としました。しかし、今にして尙ほ、かういひますと、何だか、ませた子、おしやまさんを見る心地がします。少くとも、「うれしや」の「や」の感動詞の爲でせうか、

けれども、日常の言葉でなく、節をつけて歌ふのですから、「うれし」で止めるのより、イ列の韻で止めるより、「や」の大きに明るい韻で止めるべきでせうか――。

今、氣のつきます事は、此の冒頭の

急いで來れば

でなくて、

急いで來たら

であらうとも考へます。しかし、それも、「來たら」

の「たら」が下品だから「れば」がよいとも考へられますが、如何でせう。

野遊び

梁田貞氏作曲

一、ヒラ〜ヒラ〜蝶々が舞うて

チビ〜チビ〜小鳥が啼けば

葦や たんぼぼ きれいに咲くよ

野原で遊べば おもしろ樂し

二、近くの丘には陽炎もえて

遠くの山には霞がひけば

山にも丘にも櫻が咲くよ

野原で遊べば おもしろ樂し

(大正幼年唱歌「第五集」)

歌を作るといへば、これは、ほんとに作つた歌でした。こねあげた歌でした。中學や、女學校でなく、小學校でも、もはや三四年になれば、

蝶——小鳥——

ヒラ／＼チビ／＼

舞うて——啼けば

近くの丘——遠くの丘

陽炎——霞

もえて——ひけば

など、技巧澤山の修辭に、一度は、よい氣持になれるでせう。しかし、幼兒は、恐らく、少くとも第二節の景色などは、面白くも楽しくもないのではないでせうか。殊に、歌つて教へた感じからは、各節の末の行の、

野原で遊べば

が、意外に、非音樂的であり、「へ」と「ば」との濁音重複が、氣にしますと、非常に不愉快で堪らないといふので、

野原の遊びは

と、名詞にしてしまつた事です。序に、

霞がひけば

の曲が、ミレド と下つてゐますのに、元來、「ひけば」は、レミド ともなるべき語ですから、之も氣にかけ出すと、日本語に聞えませんから、少しく無理ですが、「ひけば」ほど強くない「かゝり」にかへてみました。それにしても霞は、遠山に、ひくのですか、かゝるのですか、何れが、語法上正しいのでせう。

お山

小松耕輔氏曲

一、お山に登つて驚いた

元氣を出して登つても

頂上までは 中々で

低く見えても高かつた

二、ほんとは高くて驚いた

あれ／＼遠くが よく見える

お山の向に山がある

あんなに高い山がある。

(大正幼童唱歌第五集)

よくある例ですが、奈良に遊んで、低さうに見える三笠山に登つて、へとへとになるほりです。山の誘惑は、こんな所にもあつてニッコリさせられます。タゴートルは、お山は空へ届かうとして、膨らんだといひましたが、見てをれば、山は、いろ／＼の事を考へさせます。登つて見れば更に多くの事を考へさせます。そして、小さい人間を、大きな事實を以てどやしつけます。

さて、此の歌は、二節に分けてありますが、もと一つの驚異です。第二節は、高いから遠くがよく見えるのです。そして、第一節の續きです。別ではないのです。第一節で、「低く見えても高かつた」と驚いたのですが、更に、遠くが、よく見えるので、今更に高い事が、よく分つて、重ねて驚

いたのです。

かくて、もし、これが幼児の歌でなければ、

あれ／＼遠くもよく見える

.....

あんなに高い山もある

としたかつたのです。しかし、「も」といふほどの心の餘裕はなく、あくまで、主格本位なのです。「遠くが……」「高い山が……」なのです。強いのです。他の何も、頭には、また目には入つて來てゐないのです。眞一文字なのです。

○

おべんたう

梁田貞氏作曲

ほーら お午になりました

ちやうど おけいこ すみました

楽しい／＼おべんたう

お手々を洗つて 行儀よく

みんなでお食事いたしませう

(大正幼年唱歌第五集)

由來、食物や飲物の話や歌は、やゝ品下ると考へられてゐます。金銭の事も口にするのを憚るのが日本人の潔癖で、愉快でもありませんが、幼児にとつて、寝る事、遊ぶ事(時に泣く事さへも)そして、飲食する事は、大事な仕事であり、また、特權でさへあります。況して、小學校も同じですが、幼稚園の辨當は、楽しく、待遠しいものに相違ありません。そこで、大膽にも此の様な新作を試みたのでした。それで、思ひきつて、三行目を

あいしいくおべんたう

にとも考へましたが、あまり感覺的ですから、少し、上品に、そして、又、さうでもありますから

たのしいくおべんたう

にしました。さて、後になりまして、最後の

みんなでお食事いたしませう  
の大人びてゐるのを、

みんなで、これから、おべんたう

の自然味にかへました。

尙、第二行の

ちやうど おけいこ すみました

といふのは、都合によりましては

ちやうど、おあそび すみました

ちやうど、お遊戯 すみました

ちやうど、お唱歌 すみました

ちやうど、をり紙 すみました

ちやうど 積木が すみました

その他、實際、してゐた何事にでも、歌を直して歌ふ様にして頂きたいと思つてをります。

お手々を洗つて 行儀よく

は、食事の作法を、此の時から覺えさせたいので、殊に、食事の前後に手を洗ひ口を漱ぐ事は習

慣にしたいと思つてです。これは、少し薬が利きすぎてゐるでせうか。

○

文學上の修辭でなく、そも／＼文字でなく、言葉による表現上にも、最も善いのは最も正しい事である。最善の表現は最も正しい手法による表現に他ならない。その最も正しい手法による表現とは、即ち、最も自然的な表現である。そして、その最も自然的な表現といふのを、幼兒が最も苦もなく、正しとする事は驚くべきであり、大人は三省しなくてはならない點である。

一語説は、幼兒の表現には、少しも珍らしくない。知慧が有り過ぎ、言葉數を多く知つてをり過ぎる大人にとりてのみ、一語説は役立つと考へられます。

事實を直觀したり、何かを體驗したのでなくて題を先づ定めて作歌する時、とかく概念が先にな

つて、意外な失敗をする事があります。

お玉じやくし

小松耕輔氏作曲

お玉じやくしが、大きくなつて

短い脚が、だん／＼生えた

足が生えても歩かずに

水の中をば 泳いでまはる

早く 尻尾を無くして歩け

水の中から 飛んで來い

(大正幼年唱歌第五集)

この中に、不自然がある事に自からも心付かず作曲者も心づかれず公表後數年を経過してしまひましたが、まだ平氣でゐましたところ、

水の中から飛んで來い

が變だと、ふと心付くと、いかにも鈍感でありました。之では、まるで蛙に翹でも生えようです、

(四〇頁下段につゞく)